

オンライン日本語語彙コースの開発

佐藤 勢紀子¹⁾・佐藤 保子¹⁾・虫明 美喜¹⁾・吉本 啓²⁾

本稿は、筆者らがコンテンツを開発したオンライン教材 ALC NetAcademy 日本語語彙コースの基本的な編集方針と概要を述べたものである。本教材は、日本の教育機関で学ぶ日本語学習者を主対象として作成され、彼らが学生として日本で生活する上で必要と考えられる 3000 の基本語彙と 2325 の関連語彙を提示している。これらの語彙は 5 分野、30 カテゴリー、300 ユニットの分類され、基本語彙についてはユニットごとにワードマッチ、カナマッチ、サウンドマッチ、スペルアウトの 4 ステップの練習を通して習得される仕組みになっている。語彙コースの選定語彙と日本語能力試験出題基準語彙を比較した結果、(1) 語彙コースが能力試験初級語彙の約 70% を含んでいること、また、(2) 語彙コースの語彙が能力試験語彙に比べて、アカデミック・ジャパニーズ関連の語彙、生活の中で多用されている複合語および略語、そして近年普及した新しい語彙を多く含んでいることが明らかになった。

キーワード

オンライン教材、日本語教育、留学生、語彙、日本語能力試験

1. 教材開発の目的

近年、日本語教育の分野で各種の教材開発がさかに行われている。しかし、日本語オンライン教材に関しては、その利用環境の整備が急速に進んでいる割にコンテンツの開発が不十分であり（仁科 2003）、教育現場で広く本格的に使用されているとはいえない状況である。一方、国内の日本語教育機関の置かれている現状を見ると、景気の低迷、国立大学法人化等によってもたらされた経費削減や日本語教育担当者の労働条件の変化等の事情により、学習者の要望に応じたきめ細かな対面教育指導を十分に行うことが困難になりつつあり、何らかの対策をとることが必要とされている。その解決策の一つを、教育のオンライン化に求めることができるのではないだろうか。

本稿は、筆者らが携わった ALC NetAcademy 日本語コースのコンテンツの開発についての報告である。ALC NetAcademy¹⁾ は LAN 環境を活用するイントラネット型英語学習システムとして 1998 年から制作され、現在日本全国の 200 以上の教育機関で使用されている。ALC NetAcademy 日本語コースは、同様の方式による日本語学習システムとして企画され、2005 年 3 月に完成したオンライン教材である。同教材の学習補助言語は日本語、

英語、中国語で、コースウェアは聴解コース、読解コース、語彙コース、日本語能力試験ミニテストの 4 つのサブコースによって構成されている。筆者らはそのうち語彙コースの企画・開発を担当した。

以下、ALC NetAcademy 日本語コースのシステム全体の概要を示した上で、語彙コース作成の基本的な考え方、教材の概要を述べ、今後の課題について検討したい。

2. システムの概要

2.1 システムの構成

図 1 に ALC NetAcademy 日本語コースのシステムの構成を示す。

利用機関内に「ALC NetAcademy」サーバを設置し、イントラネットを通じて学習者に教材を提供する。学習者は LAN に接続された端末 PC があれば、いつでも、機関内のどこでも学習することが可能である。教育担当側の管理者は、学習者の学習履歴を閲覧し、一括管理することができる。

¹⁾ 東北大学国際交流センター

²⁾ 東北大学高等教育開発推進センター

¹⁾ コンテンツ開発元：株式会社アルク。システム開発元：日立ソフトウェアエンジニアリング株式会社。販売元：株式会社アルク教育社。

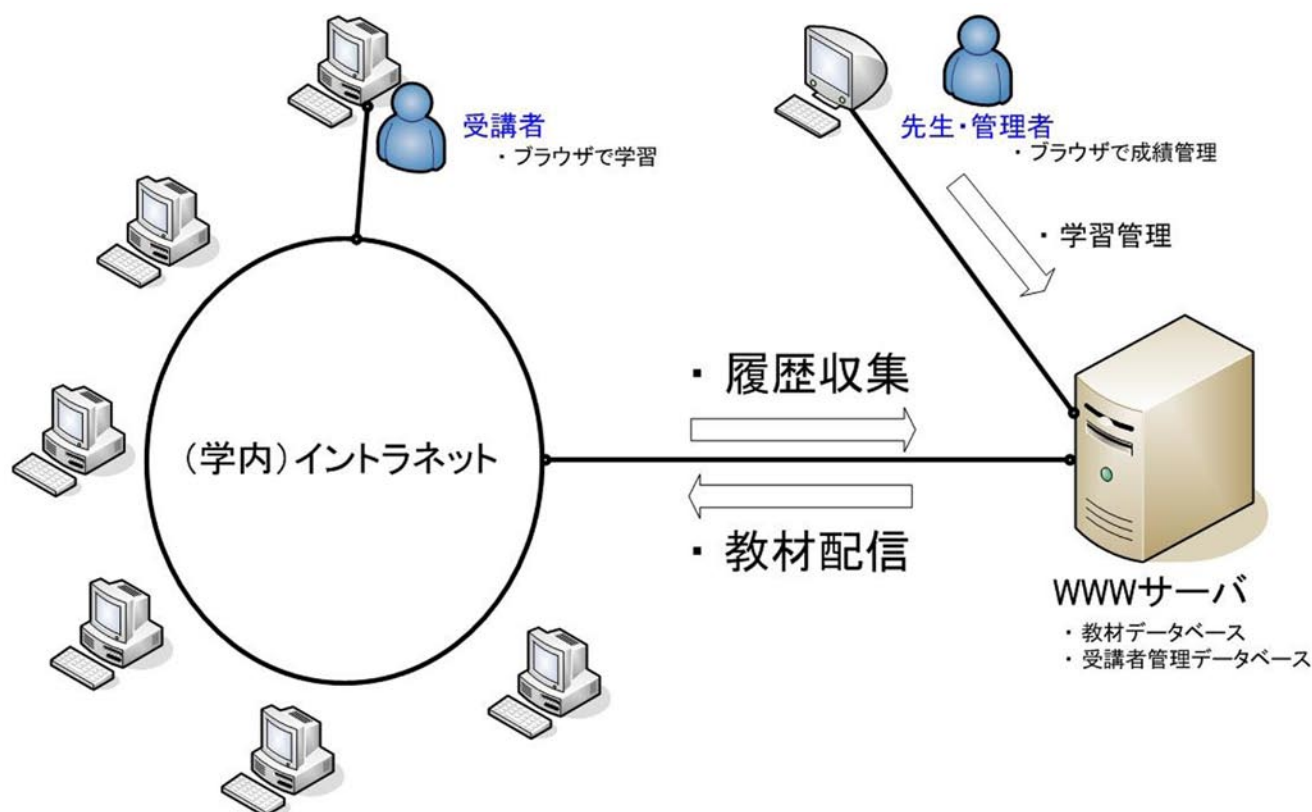


図1 システムの構成

2.2 サーバおよびクライアントの要件

サーバおよびクライアントの環境についての要件は、次のとおりである。

【サーバ環境】

●ハードウェア

CPU：Pentium III 800MHz 以上

メモリ：1GB 以上奨励

HDD：1GB 以上（OSを除く）

●ソフトウェア

「Windows 2000 server+SP2 と Internet Information Services 5.0」

もしくは

「Windows 2003 serverとInternet Information Services 6.0」

SQL Server 2000+SP3a

SQL Server クライアントライセンス

ALC NetAcademy System

OSによっては、多言語表示のためにOS CD-ROM によるインストールが必要。

【クライアント環境】

●ハードウェア

CPU：Pentium III 800MHz 以上

メモリ：128MB 以上（256MB 以上推奨）

HDD：100MB 以上の空き容量

サウンドボード必須

●ソフトウェア

Windows 2000 Professional+SP4

もしくは

Windows XP Home Edition

もしくは

Windows XP Professional

Internet Explorer 6.0 SP1

Flash Player 7.0

3. 語彙コース作成の基本的な考え方

先に述べたとおり、筆者らはこの日本語学習教材のうち、語彙コースのコンテンツの開発を担当した。本節では、語彙コース作成の基本的な考え方について述べる。

本語彙コースは、日本の教育機関で学ぶ日本語学習者を主対象とし、彼らが社会生活・学生生活を送る上で必要であると考えられる基本的な語彙3000語を、マッチング、スペルアウト等の練習を通じて習得できるように

したものである。これまで開発された日本語教育のためのCAIソフトやオンライン教材は、数量的には少ないものの、言語技能別に見ると、文字、文法、発音、聴解、読解、作文など、ほぼすべての技能に対応する教材が作られており、データベースや辞書の作成も行われている²⁾。しかし、語彙に関しては、理工系学部留学生の技術日本語学習支援のための教材は開発されているが（上村ほか 2003）、特定分野に限定されない日本語基本語彙の学習・指導を目的とした汎用的なオンライン教材は開発されていない。したがって、この語彙コースが開発された意義は大きいと考えられる。

3000語の基本語彙を「生活」、「勉強・研究」、「政治・経済」、「文化・娯楽」、「科学・技術」の5分野に分けて提示し、日本の大学その他の教育機関に所属する留学生、就学生等が自分のペースで広範囲の語彙を学習することができるようにした。5つの分野をさらに語彙の範疇、使われる場面や状況の違いから30のカテゴリー、300のユニットに細分した。各ユニットの10個の語彙はそれぞれ同一の範疇に属するもの、あるいは同じ場面や状況で用いられるものであり、相互に強い関連を持っている。このため、使用者は比較的容易に語彙を理解・記憶し、短期間に語彙力を伸ばすことができると期待される。

学習段階から言えば、初級から上級までに対応しているが、特に初級後半から中級まで（日本語能力試験4級～2級程度）の学習者が使用者の中心となると考えられる。日本語の入門段階を終え、初歩的な文字の知識と基礎文法を身につけた学習者が、授業の中で、あるいはクラスでの日本語学習と並行して、あるいはまた自習の手段としてこの教材を用いることで、生活の様々な場面で実際によく使われる語彙を効率的に習得できるよう工夫した。使用者の学習段階が多様であることを考慮して、初級レベルの語彙を主体とする比較的易しいユニットと中級レベル以上の難易度の高い語彙を集めたユニットを設け、初級の学習者にも取り組みやすいようにした³⁾。

4. 教材の構成

ここでは、語彙コースの各ステップにおける学習方法を説明し、教材全体の枠組みを紹介する。上述のように、語彙コースには300のユニットがあるが、使用者はユニットごとに、次の5段階のステップを通じて学習するシステムになっている。

- (ア) ワードマッチ
- (イ) カナマッチ
- (ウ) サウンドマッチ
- (エ) スペルアウト
- (オ) 単語リスト

ワードマッチからスペルアウトまでの4つのステップでは、語彙習得のための練習を行う。使用者は必ずしも

すべての練習を行う必要はないが、各ステップにおける学習履歴が記録され、好成績をあげれば、語彙コース教材一覧画面に表示されたユニットの色彩が変わる仕組みになっている。以下、各ステップの学習方式について解説する。

4.1 ワードマッチ

ワードマッチは、ユニットを構成する10語を漢字・仮名まじりで表記したものと、それらの語の英語訳もしくは中国語訳とのマッチングを行う段階である。左側に日本語の語彙が、右側に訳が表示されており、語彙と訳をクリックすることでマッチングを行う。マッチングが正しく行われれば、「○」が表示され、その語彙を発音した音声が出る。マッチングが誤っていれば「×」が表示されるが、正解に達するまで選び直すことが可能である。



図2 ワードマッチ（正解表示画面）

マッチングを終えた時点で「解答」ボタンを押すと、画面の下部に全問の正解が示され、解答者が間違った部分は赤字で表記される仕組みになっている（図2）。なお、訳語を英語にするか中国語にするかは、ユニットを選択する前の段階で使用者が決めることができる。

4.2 カナマッチ

語彙教材のみならず、日本語の教材作成に必要な検討事項として、日本語の表記の問題をどう扱うかということがある。当初、漢字力が不十分な学習者のことを考え

²⁾ 国際日本語普及協会『AJALT』24号に2001年5月現在でのインターネット日本語教材が用途別、技能別に紹介されている。仁科（2003）もICT利用の教材作成、データベース構築について論ずる中で、聴解、会話、読解、作文の4技能のそれぞれに対応した教材を紹介している。

³⁾ ただし、教材本体にはユニットの難易度は表示されていない。筆者らが作成した難易度を明示したユニット一覧を、アルク教育社を通じて教材導入機関に提供することが可能である。

て、ワードマッチの漢字まじりの語彙に括弧付きで読み仮名を付けることも検討したが、表記にかなりのスペースが必要となり、読みづらくなるため、ワードマッチとは別にカナマッチのステップを設けることとした。図3はカナマッチの画面である。



図3 カナマッチ

このカナマッチというステップは、非漢字圏の学生に役に立つのみならず、使用者の半数以上を占めると予測される中国人学習者⁴⁾にとっても有用である。彼らにとっては漢字が使われているワードマッチは易しすぎて練習になりにくく、日本語と中国語の異同を確認する以上の意味を見出しにくいと考えられるためである。

企画の初めの段階ではこのステップを「ひらがなマッチ」と称していたが、3000の語彙の中には片仮名語も多く含まれ、片仮名語を平仮名で表記することは不自然であるため、このステップの名称を「カナマッチ」とし、平仮名と片仮名を併用して表記することとした。練習の方式はワードマッチと同様に、英語訳もしくは中国語訳とのマッチングとなっている。正解確認の方式もワードマッチと同様である。

4.3 サウンドマッチ

ユニットの語彙10語を発音した音声を聴いて、英語訳もしくは中国語訳とのマッチングを行うステップである (図4)。

ここでは左側の10個の日本語語彙の欄には「？」記号のみが入っており、そのうちいずれかを任意にクリックすると、音声が出て、選択済みであることを示すためにその欄の色が変わっている。マッチングの仕方、正解の確認の仕方はワードマッチ、カナマッチと同様である。ただし、このステップでは、正解の一覧が出た後で、音声ボタンを押して発音を確認することができる。



図4 サウンドマッチ

4.4 スペルアウト

日本語の語彙を平仮名で入力するステップである。図5にスペルアウトの画面を示す。

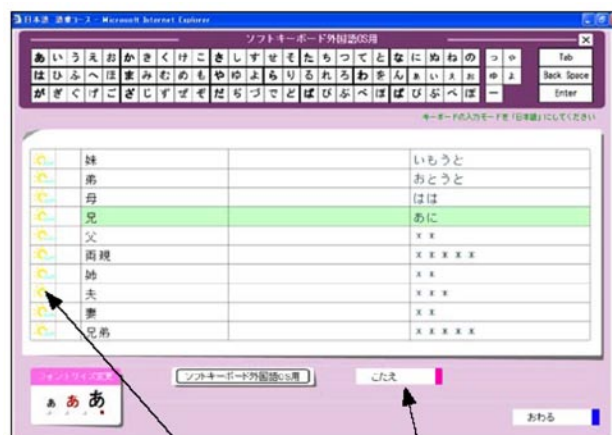


図5 スペルアウト (キーボード付)

解答欄には、平仮名で表記した場合の語彙の文字数に応じた数のアステリクス記号があらかじめ表示されており、さらに、ヒントマークをクリックすると、語頭から1文字ずつ表示されるようになっている。パソコンで日本語が使用できない環境にある学習者のために、画面上で仮名を選択して入力できるキーボード機能を付けた。

4.5 単語リスト

語彙コースの各ユニットの最後のステップである。ここでは、図6に示すように、当該ユニットの基本語彙10語に加えて、関連語彙 (最大で10語) も合わせて一覧できるようにした。

⁴⁾ 中国からの留学生は日本における受け入れ留学生の半数以上を占めている。この教材が中国語に対応していることから、使用者の中で中国人日本語学習者の占める比率が高くなることが予測される。

単語リスト 生活・家族・家族 (1)				
音声	日本語	よみがな	英語	使い方
●	両親	りょうしん	parents	～とくらす
●	父母	ふぼ	parents	
●	父	ちち	father	私の～
●	お父さん	おとうさん	father	Aさんの～
●	母	はは	mother	
●	お母さん	おめえさん	mother	
●	夫	おつと	husband	私の～
●	主人	ごしやじん	husband	友だちの～
●	妻	つま	wife	私の～
●	嫁	かみい	wife	
●	奥さん	おくさん	wife	となりの～
●	兄弟	きょうだい	brother	
●	姉妹	しまい	sister	
●	兄	あに	older brother	
●	お兄さん	おにいさん	older brother	
●	姉	あね	older sister	
●	お姉さん	おねえさん	older sister	
●	弟	おとうと	younger brother	
●	妹	いもうと	younger sister	

図6 単語リスト

ワードマッチからスペルアウトまでのステップでは、語彙の提出順には特に決まりはなく、ステップごとに異なる順序で基本語彙が並べられている。しかし、このリストでは、基本語彙・関連語彙をとりまぜ、意味上の関連を考慮して、学習者が記憶しやすいと考えられる順序で提示した。

単語リストは、左から、

語彙（基本語彙＋関連語彙）⇒ よみがな ⇒
英語訳／中国語訳 ⇒ 使い方

の順に欄が設けられている。基本語彙の左側には音声ボタンが付いており、クリックして音声を再確認することができる。最後の「使い方」の欄には、語彙の使用例として連語もしくは短い句を掲示し、語彙の用法についてのヒントが得られるようにした。この「使い方」は、全体の半数近くの語彙に付けられている。単語リストは印刷することが可能である。

5. コンテンツ

本節では、教材のコンテンツとしての語彙について述べる。基本語彙の選択基準、語彙数を3000語とした根拠、語彙選定の方法を述べ、さらに、日本語能力試験の出題基準語彙との重なりを調べた結果を報告する。

5.1 語彙の選定基準

この語彙コースは使用者が日本語の基礎的な文法を習得していること、もしくは現在習得段階にあることを前提としており、助詞・助動詞の用法や動詞の活用を学ぶためのものではない。この教材の主要な目的は、実質的な意味を持つ自立語、とりわけ名詞、動詞、形容詞（形容動詞を含む⁵⁾、以下同じ）、副詞の意味と用法を提示することであると考え、それらの品詞にほぼ限定して語彙を選定した。

各ユニットの基本語彙10語は原則として名詞語彙とし、語彙リストにのみ掲載される関連語彙も名詞を中心に選んでいる。ユニットのテーマに関連する動詞、形容詞、その他の品詞の語彙は、原則として関連語彙とした。基本語彙の名詞に「する」が付いて動詞になる場合も、語彙リストのスペースに余裕があるかぎり、その動詞を関連語彙として併記するようにした。ただし、カテゴリーによっては、「動詞」「形容詞」「動詞・形容詞」「副詞」など、品詞名をタイトルとするユニットを末尾に設け、そこにカテゴリー関連の和語動詞、形容詞、副詞等を集めて提示しているケースもある。

5.2 語彙数

大学で日本人と同じ講義を聴くことが可能とされる日本語能力試験1級レベルの語彙数は約10000であるが⁶⁾、その中には、大学での勉学・研究をめざす学習者にとって必要度が低い語彙や、近年はあまり使われなくなった語彙も少なからず含まれている。また、到達目標が高すぎることで、マッチングやスペルアウトの練習をする語彙が多すぎることは、日本語を学び始めて間もない初級の学習者にとっては大きな負担になる。教材の核となり練習を要する基本語彙3000に関連語彙2000余を合わせて5000語程度の厳選された自立語を習得できれば、日本で社会生活を営み勉学・研究を行う基礎作りをすることが可能であるという見通しのもとに、語彙の選定を行い、結果として計5325語を得た。

5.3 語彙選定の方法

語彙を選定するに当たっては、まず、複数の現代用語辞典の項目立てを参考にし、留学生等のニーズという観点を加味して、大枠として先に記した5分野を定めた。5分野中、「勉学・研究」の分野が、留学生、就学生等の学生を主対象とするこの教材を最も大きく特徴づける部分である。5つの分野を設定した上で、各分野の用語集、アカデミック・ジャパニーズ関連の日本語教材、大学で作成・配布している大学案内、便覧、授業概要等の冊子類、留学生向けの書類やガイドブック、地方自治体の出版物などから語彙を抽出し、カテゴリー、ユニットの分類を決めて仕分けを行った。抽出と分類の作業のプロセスの中で、各分野のユニット数を次のように定めた。

「生活」分野：100ユニット

「勉学・研究」分野：70ユニット

「政治・経済」分野：65ユニット

⁵⁾ 日本語教育の分野では、国文法における「形容詞」を「イ形容詞」、「形容動詞」を「ナ形容詞」として扱うのが一般的である。

⁶⁾ 国際交流基金・財団法人日本国際教育協会編著『日本語能力試験出題基準』（凡人社、2002）所載の基準語彙による。

「文化・娯楽」分野：30ユニット

「科学・技術」分野：35ユニット

カテゴリー名と各カテゴリーのユニット数を明記した語彙分類の大枠を表1に示す。表中「E」と記された欄の数値は、比較的難易度の低い語彙を多く含んだ初級者向けのユニットの数を示している。

それぞれのユニットの中で、基本語彙(10語)とすべきか関連語彙(最大10語)とすべきか判断しかねたケースについては、上級レベルの日本語学習者、日本語教員、留学生担当事務職員計57名を対象とするアンケート調査を行い、その結果にもとづいて処理した⁷⁾。さらに、日本語能力試験の出題基準語彙との重なりを調べ、

表1 語彙分類の大枠

分野	カテゴリー	ユニット数	E	単語数
生活	家庭	8	3	1000
	衣類	6	4	
	食事	13	9	
	住居	10	7	
	家庭経済	11	5	
	コミュニケーション	17	7	
	心理状態	9	1	
	行事	5	5	
	健康	14	1	
	手続き	7	1	
勉学・研究	学校	6	2	700
	キャンパス	10	3	
	学籍	6	0	
	勉学	17	6	
	研究	7	1	
	論文	21	0	
	経済生活	3	0	
政治・経済	政治	17	0	650
	外交	7	0	
	経済	15	0	
	産業	13	1	
	交通	13	3	
文化・娯楽	歴史	2	0	300
	宗教	3	0	
	芸術	14	1	
	レジャー	11	4	
科学・技術	自然環境	7	3	350
	数学	10	1	
	科学	12	0	
	コンピュータ	6	0	
計		300	68	3000

4級から2級の語彙で選ばれていない語彙の中から、特に必要度が高いと思われる語彙を選んで補った。

5.4 能力試験語彙との関係

選ばれた基本語彙・関連語彙は合わせて5325語である。日本語教育の分野で従来語彙指導の最大の指針となってきた日本語能力試験出題基準語彙(以下、「能力試験語彙」との重なりを見ると、そのうち2843語が重なっている。重なり語彙の数を能力試験の級別に見ると、表2のようになる⁸⁾。4級レベルすなわち初級前半を終えた段階の能力試験語彙のほぼ4分の3をカバーしていることが注目される。初級を終えた段階の3級レベルを見ても、約70%が重なっている。

表2 能力試験各級語彙と語彙コース選定語彙の重なり

	各級語彙総数	重なり語彙数	重複率(%)
1級	7800	2778	35.6
2級	4833	2232	46.2
3級	1315	914	69.5
4級	679	512	75.4

ただし、ここで重ならないとされた語彙の中にも、「洗濯する」(語彙コース)「洗濯」(能力試験)のような、「する」動詞の「する」の表示の有無の違いによるもの、「1枚」「1週間」(語彙コース)「～枚」「週間」(能力試験)のような、助数詞に具体的な数を付与して示したかどうかによる違いなどが相当数ある。加えて、語彙コースで取り上げた語彙の一部に能力試験語彙が入っているケース(「国立大学」の中の「大学」など)、語彙コースの中で示した語彙の「使い方」の例に能力試験語彙が使われているケースを含めれば、重なり比率はさらに大きく上昇すると見られる。

一方、上の比較の結果から明らかなように、語彙コースで取り上げられているが能力試験語彙には入っていない

⁷⁾ ただし、その後、訳語が同じ語彙や発音が同じ語彙が同一ユニットの基本語彙に入っているとマッチング練習ができないという事情から、基本語彙と関連語彙の入れ替えをせざるをえないケースもあったため、このアンケートの結果がすべてそのまま基本語彙の選定に反映されているわけではない。

⁸⁾ 表2における能力試験各級語彙については、すべて注6)の『日本語能力試験出題基準』に示されている通りであるが、各級語彙相互の関係は次の通りである。すなわち、この『出題基準』においては、4級語彙はすべて3級語彙に含まれ、2級語彙はすべて1級語彙に含まれていることは明らかである。しかしながら、3級と2級の語彙の関係については、明確に示されていない。今回この重なり語彙数を確定するにあたって調査した結果、『出題基準』において、3級語彙であるにもかかわらず、2級に含まれていない語彙が93語あった。そこで、今回2級・1級の重なり語彙を確定するにあたって、この93語に含まれる語彙コースの語彙65語を、2級・1級の語彙から削除した。

い語彙も相当数ある。そうした語彙についてその特徴をあげれば、次のような語句を多く含んでいることを指摘することができる。

(1) アカデミック・ジャパニーズ関連の語彙

例：「レジュメ」、「飛び級」、「配点」、「学会誌」

(2) 生活の中でよく使われる語彙で、複合語や略語になっているもの

例：「健康保険」、「自己負担」、「分割払い」、「予防接種」、「学食」、「朝練」

(3) 近年よく使われるようになった新しい語彙

例：「コンビニ」、「クレジットカード」、「高齢化」、「フォント」

(1)のアカデミック・ジャパニーズ語彙については、分野の設定の段階から意図的にその方面の語彙を多く選んでいるので、当然の結果と言える。(2)、(3)については、特に意図したわけではないが、現代日本社会における実際の生活の中で多用される語彙を選択した結果、このような特徴が生じたと考えられる。他に、基本語彙の3分の1を占める「生活」分野の語彙の範囲で見ると、特に病気に関する語彙（「不眠症」、「便秘」、「初診」等）、食べ物に関する語彙（「てんぷら」、「すし」、「りんご」、「たまねぎ」等）、行事名（「七夕」、「お盆」等）で、能力試験語彙にないものが目立った。

6. 今後の課題

以上、日本語オンライン教材ALC NetAcademy日本語コースのシステムの概要を示し、そのうち筆者らが作成を担当した語彙コースについて、作成についての基本的な考え方および教材の概要を述べた。この教材が多数の日本語教育機関に導入されて利用されるようになれば、学習者がより多くの、また従来の授業における対面方式とは異なるタイプの日本語学習の機会を持つことができるようになると考えられる。特に語彙の学習に関しては、たとえば会話や聴解などインタラクションの訓練が重要な他の分野に比べてオンライン教材を利用することの効果は大きいと考えられ、オンライン方式による語彙指導の様々な可能性を引き続き探っていく必要がある。

今後の課題として、現在各教育機関で行われている日本語教育プログラムの中に、この開発教材をどのように組み込むことが可能でありまた効果的であるかを検討することが必要である。日本語の授業の主教材や、自習用教材としての使用にとどまらず、学習者の日本語能力の判定、入学が決まった協定校学生の渡日前の準備教育などにこの教材を活用することができるという見通しを筆

者らは持っている。こうした教材の利用法の詳細については、稿を改めて論ずることとしたい。

謝 辞

本研究資料の原稿執筆にあたって情報提供などの御協力をいただいた株式会社アルク日本語プロジェクトの新城宏治氏に感謝いたします。

(平成16年12月13日受付)

参考文献

- 国際日本語普及協会「インターネットで日本語がここまで可能になった」AJALT、24、pp.24-31、2001
 仁科喜久子「第二言語としての日本語の学習環境とICT利用支援」日本教育工学雑誌、27-3、pp.233-236、2003
 上村隆一、水本光美、池田隆介「外国人留学生のためのオンライン型技術日本語教材開発」日本教育工学雑誌、27 (Suppl.)、pp.157-160、2003



佐藤 勢紀子

1985年東北大学大学院文学研究科国文学国語学日本思想史学専攻博士課程単位取得退学。1988年東北大学文学部講師。2002年東北大学留学生センター教授。現在、国際交流センター教授。2001年より東北大学大学院国際文化研究科で協力講座を担当。博士（文学）。日本語教育学会、専門日本語教育学会、日本思想史学会会員。主な研究テーマは、アカデミック・ライティング、日本語の文末表現、『源氏物語』の仏教思想など。



佐藤 保子

1973年東北学院大学英文科卒業。1990年より東北大学教養部特別課程・日本語研修コース非常勤講師。その後、東北大学留学生センター非常勤講師を経て、現在、東北大学国際交流センター非常勤講師。「漢字」及び「文法」の授業を担当。日本語教育学会会員。主な研究テーマは、漢字教育・日中同形同意語。特に漢字圏対象の漢字語彙教育に関心を持つ。



虫明 美喜

1987年東北大学大学院文学研究科国文学国語学日本思想史学専攻修士課程修了。1988年東北大学文学部国文学科助手。2002年より東北大学留学生センター客員助教授。現在、国際交流センター非常勤講師。日本語教育学会、異文化間教育学会、日本近代文学学会会員。アカデミック・ライティング、異文化間教育、日本語教育における文学教育などに強い関心を持っている。



吉本 啓

1981年東京大学大学院人文科学研究科修了（言語学専攻）。1996年ドイツ連邦共和国シュトゥットガルト大学コンピュータ言語学科Ph.D.取得。NTT基礎研究所、ATR自動翻訳電話研究所、シュトゥットガルト大学を経て、1996年より東北大学教授。現在、同大学大学院国際文化研究科および高等教育開発推進センターを兼任。主として形式文法と言語情報処理の研究を行ってきたが、現在は脳機能研究を含む認知科学を基礎とする第2言語習得研究に関心をもつ。

Development of an on-line Japanese vocabulary course

Sekiko Sato¹⁾ · Yasuko Sato¹⁾ · Miki Mushiake¹⁾ · Kei Yoshimoto²⁾

This paper reports the development of an on-line teaching material titled “ALC NetAcademy Japanese vocabulary course”. Supposed users of the course are Japanese learners enrolled in schools or universities in Japan. The vocabulary consists of 3000 basic words and 2325 related words, all of which are divided into 5 fields, 30 categories and 300 units. For the basic words, 4 steps of exercise are available: “word match”, “kana match”, “sound match” and “spell out”. A comparative investigation on the vocabulary course and the standard vocabulary for Japanese proficiency test made it clear that (1) nearly 70% of elementary words in the standard vocabulary are included in the vocabulary course and (2) the newly introduced words in the developed course are characterized as terms used for academic purposes, daily-used compounds/abbreviations, or up-to-date words which were not common when the standard vocabulary for Japanese proficiency test was chosen.

Keywords

on-line teaching materials, Japanese language teaching, vocabulary, international students, Japanese proficiency test

¹⁾ Tohoku University, Center for International Exchange

²⁾ Tohoku University, Center for the Advancement of Higher Education